

# 社会科学習における対話力の育成

## ～対話型学習の構築～

片桐 宏

社会科学習では、知識や技能だけではなく、関心・意欲、資料活用力、社会的判断力、表現力、意志決定力を重視することが大切である。それらの基礎・基本となる能力の育成や定着をめざすためには、単元構成や学習課題の段階において対話型学習を取り入れ、社会的事象、自分（自己）、他者との対話を深めさせなければならない。ひとり学習や全体学習の場面を通し、お互いの学びを高め合い、自分の思いや考えを更に深めるといった対話型学習を発展させることで、一人ひとりの対話力を育てることをねらいと位置づけ研究を進めた。5年の社会科学習を進めた結果、学ぶ意欲や情報収集力や表現力だけではなく、より多面的に社会的事象を考えることで価値判断力も伸長した。また、他者に対する受容的な心や態度、考えを聴き合う、自分の考えを伝えるといった対話力が身についてきた。対話力を更に育成していくためには、対話型学習を展開する上で重要な位置をしめる単元構成や学習課題の設定を工夫することが課題である。

キーワード：対話型学習、対話、対話力、単元構成や学習課題、ひとり学習、全体学習

### 1. はじめに

#### 1.1. 社会科学習で大切にしている点

社会科では、「国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」ことを目標としている。したがって、社会のしくみや社会的事象を単なる知識として覚えるだけではなく、社会生活の理解を深める中で多面的に社会的事象をとらえ、公正に判断できるような資質や能力を育成しなければならない。社会科学習で知識の定着を図るには、主体的な追究活動を通して社会的事象と深く対話をしなければならない。社会的事象に対し、ひとり学習で問題を主体的に調べ考え、生じた疑問を解決していく。また、全体学習で他者と学び合う中で自分（自己）の考えを更に深め合っていく。ひとり学習で調べ考える活動をより充実させ、全体学習で学び合う中で対話力を育成したいと考えた。それらの学習を通し、自分なりに思考・判断しながら問題を解決する力だけではなく、調べた内容を表現する力、学習の成果を自らの生活向上のために生かす力などが身につくのである。社会的事象をより多面的にとらえることで、公正かつ総合的に判断する力を育むことができ、より広い視野から考察・判断することで個性的な見方や考え方が育っていくのである。

#### 1.2. 社会科学習における対話力とは

社会科学習では、一人ひとりの主体的な追究活動を通し、社会的事象と深く関わらなければならない。また、全体学習で話し合う場面では友だちの多様な考えに触れ、意見を交換したり共有したりすることで社会

的事象に対するより深い学びがつけられていく。社会科学習における対話力とは、次のように考えている。

- ①他者の考え（主張や結論）に耳を傾け、しっかりと聴き取る力。
- ②自分の考え（根拠となる情報など）を、簡潔に相手に伝える力。
- ③他者の考えと自分の考えを比較し、不明な点や納得できない事柄を質問する力。
- ④対話力の基盤として、他者を尊敬し、謙虚に学ぶとする受容的な心や態度。

これらの対話力は、社会科学習だけではなく他の教科学習や教育活動全体を通して子どもたちに身につけさせたい資質や能力である。社会科学習では、自分と違った考えを示す他者との対話を通し、「自分と他者の考え方の違い」、「他者の考えの根拠」、「どちらが妥当な判断をしているのか」など、自分と他者を比較しながら自分の考え方や判断などをより確かなものにしていく。社会科学習で他者との対話に欠かせない、お互いに伝えたいことを理解し共有し合う対話力を育てていくことが大切だと考えている。

### 2. 対話力の育成に向けて

#### 2.1. ひとり学習と全体学習

社会科学習では、子どもたちが主体的に調べ考える活動を展開する上で単元構成が重要な位置を占める。その単元の中で、追究活動を行うひとり学習と、みんなで話し合う全体学習を相互に関連させながら学習を進めた。ひとり学習は、一人ひとりの子どもたちが学習課題について主体的に調べ考える場面であり、社会的事象や自分（自己）との対話を行う。問題意識をも

って学ぶ態度や自分の言葉で表現する力、学習の成果を自らの生活向上に生かす力などが身につくとともに、社会的事象の意味や働きなどを考える力を育て、自分が調べた内容を整理しながら考えが深められる活動でもある。5年になると、社会的事象も広がり、ひとり学習はそれまでの聞き取り調査やインタビュー中心から、インターネットや図書を使ったものへと変化していく。そこで、単元構成の中に身近な地域にある社会的事象を位置付け、観察や調査・見学、体験などの具体的な活動を取り入れるようにしている。全体学習は、ひとり学習で調べ考えた内容を出し合うことで他者と対話する場面である。学習の経過や成果を交換・交流させることで他者の多様な考えに触れ、社会的事象へのより深い学びがつけられる。また、全体学習の中で表出された考えをみんなで整理することで、新しい学習課題が生まれ、意欲的に調べ考える活動が始まるのである。

## 2.2. 対話力を育てる対話型学習

5年の社会科学習では、日本の農業（米作）、水産業学習（マグロ）と関連させ、食料問題や食料自給率についての学習を展開した。また、工業生産の学習では、紀の川市桃山町にある食品（ジュース）工場を取り上げ、工場の“特色やこだわり”について深く考えることができた。対話型学習で特に重要なのは、単元構成と学習課題の設定である。子どもたちが、主体的に追究する学習を進めるためには、社会的事象の吟味が必要となる。まず、子どもたちはこのような社会的事象と出会い、様々な方法で対話を行う。ひとり学習の場面では、自分（自己）との対話がスタートする。社会的事象に対し、自分自身で調べ考える対話である。自分が調べた内容を確かなものとするために、資料を活用しながら根拠を明らかにする。自分自身の問題を追究し、さらに深化させることができる。観察力や資料活用能力が必要となる。また、それらの活動を通して社会的思考力を育てることもできる。全体学習の場面では、学び合いの中で考えを深め合う他者との対話を行う。自分と他者の考えを比較することで、新しい知識や情報を得ることができる。また、「どうしても納得できない」「わからない」点などを他者に質問することもできる。自分の価値観、見方や考え方を明らかにするだけでなく、他者の思いや自分とは違った考えに触れることで、学習課題をみんなで解決することにつながる。

社会科学習では発表の根拠となる資料を大切にしたいと考えている。「〇〇に書いていた」「〇〇の資料を見て考えた」といった対話型学習の共通の基盤をつくるのが大切である。対話型学習をすすめるには自分の思いや考えを発表する力、他者の考えを正しく聞く力が必要となる。また、自分の思いや考えを他者と比較しながら質問する力、相手の違いを認め受け入れて

いく受容的な心や態度も大切となってくる。このような対話型学習では、相手の意見にしっかりと耳を傾け、自分の考えをさらに発展させて発言することが大切になる。対話型学習を進め、対話力を育てる上で、次の2点を大切にしたいと考え取り組んでいる。

### (1) 座席表の活用

座席表を活用することで、対話型学習がよりスムーズに進められると考えている。同じ考え方をしている子、相反する意見をもっている子など、事前に座席表を作成することで、学習展開を事前に把握することができる。また、調べ学習での進捗状況を把握することで、一人ひとりの確かなみとりと支援にもつながる。

### (2) 着目児の設定

数名の着目児を設定し、対話型学習に活かそうと考えた。ひとり学習でその子が何について調べ考えているのか、どのような資料を準備しているのか等を把握することで着目児のみとりや支援につながる。また、着目児の発言内容や考え方を通して単元構成や学習課題の適切さ等を読み解くことができると同時に、クラス全体の子の変容も見ることができる。

## 3. 単元学習の実際

本研究において取り組んだ、『ジュース工場のひみつ～和歌山の食品工場～』の単元学習について報告する。

### 3.1. 単元計画（全15時間＋総合的な学習の時間）

- 第1次…わたしと「ジュース」《作文とアンケート》
- 第2次…「お茶やジュース」について調べよう！
- 第3次…「お茶やジュース」について話し合おう！
- 第4次…和歌山のみかんについて調べよう！
- 第5次…「和歌山ノーキョー食品工場」を見学しよう！
- 第6次…見学でわかったこと、疑問点を整理しよう！
- 第7次…クラスの課題を決め、みんなで話し合おう！
- 第8次…和歌山の食品工場についてまとめてみよう！

### 3.2. 「ジュース工場のひみつ」の学習より（抜粋）

○第1次…わたしと「ジュース」《作文とアンケート》

この単元学習の導入として、自分の生活と「お茶やジュース」との関連性を考えることにした。今年の夏は記録的な猛暑で、9月の中旬まで暑い日が続き、清涼飲料水はどの家庭でもよく飲まれていた。また、「お茶やジュースは、どこでどうやって作られていると思いますか？」という質問には、様々な予想が出された。

- ・工場で大量生産されているだろう。
- ・働いている人が多いだろう。人手がいるだろう。
- ・すごい機械をつかっているだろう。
- ・工場はきっと清潔だろう。
- ・東京や大阪にあるメーカーの会社や工場で作っている。
- ・1日に何十万個もつくっているだろう。
- ・果実をすりおろして、水と混ぜているだろう。
- ・さとう水に果実や炭酸を加えているだろう。
- ・オートメーション化されているだろう。

○第3次…「お茶やジュース」について話し合おう！

前時に「お茶やジュース」についての疑問点や調べたいことを話し合った。子どもたちは「お茶やジュース」との対話を始めた。原材料のこと、缶やペットボトルのこと、機械のこと、無果汁の味など様々な“なぞ”が出された。その“なぞ”に対して、自分（自己）との対話が行われた。たくさんのペットボトルを教室に運び、ラベルを比較する子、インターネットで「お茶やジュース」のメーカー名や工場の場所を調べた子、スーパーやコンビニで聞き取り調査をした子など、様々な手段で調べ学習を進めていた。調べた内容をみんなの前で発表し合う中で、新たな情報を得ることができると同時に、自分の考えを深め合っていくこともできた。清涼飲料水の手メーカーは、全国各地に10~30ヶ所の自社工場をもっている。しかし、その中に和歌山県内の工場が1つもなかった。子どもたちからは、「遠くから運ばれてくるのかな」、「和歌山にはジョインのジュース工場しかないのか」という新しい疑問が生まれた。

○第4次…和歌山のみかんについて調べよう！

「ジョインジュース」で有名な桃山工場では、和歌山県特産のみかんを搾汁してジュースを製造している。みかんについては、1学期の日本の農業学習では少ししか触れていない。そこで、和歌山のみかんについて学習を深めたいと考えたのである。社会科資料集や副読本《わかやまの農林水産業》、インターネットなどを活用しながら自由に調べさせた。みかんの生産量は、2004年から全国1位であること、1975年をピークに生産量は3分の1に減少していること、みかん栽培の歴史、品種、栄養、最近のブランドみかんのことなど自分が調べてきた内容を話し合った。

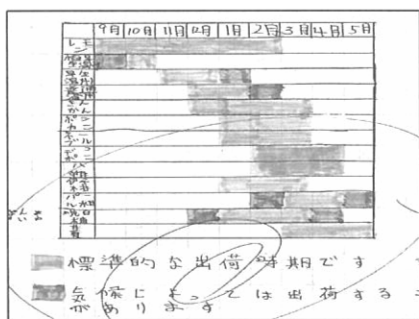


図1. 柑橘類の出荷時期資料 (A児)

柑橘類の出荷時期を調べ、種類によって栽培される時期がちがうことを表にまとめた。

年度別の産出量や県別生産量を調べ、ていねいにグラフに表していた。

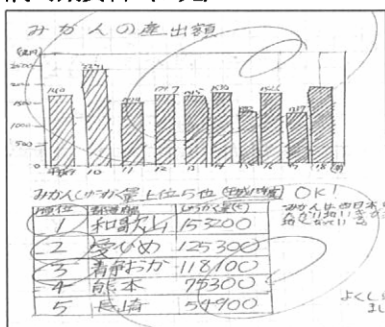


図2. みかんの産出量資料 (B児)

○第5次…「和歌山ノーキョー食品工場」を見学しよう！

この工場は、日本で初めて「ペットボトル入りの飲料水」を生産し、その技術は全国各地のジュース工場に広まったことで知られている。また、冬期間《10月~2月》に和歌山産のみかん（商品化されないみかん）を搾汁し、「JOIN ジュース」として現在も販売を行っていることで有名である。冬期間以外は、大手飲料水メーカーの「お茶やジュース」を製造し、工場の全生産量の95%は他社メーカーの製品であるという話も聞くことができた。工場見学の後半、子どもたちが事前に調べ考えてきた数多くの質問に、工場関係者の方が答えてくれた。社会科学習では、見学調査がとても重要である。子どもたちは、自分の五感を使って工場内を見学することで、社会的事象に対する対話を確かなものとするとともに、自分（自己）との対話を深めることにもつながるのである。見学後、子どもたちの作文の中には見学でわかったことや新しい疑問が生まれていた。



写真1. ジュース工場の見学の様子

◎見学で知ったことや疑問点

みかんジュースは高いけど売れているというのがわかって、きずの入ったみかんなどを使っているということもわかり、環境にいいなあと思いました。なぜ、みかんを輸入しないのかということも疑問に思いました。輸入すれば、1年中みかんジュースが好きな人も働いている人もうれしいのにどうしてなのかなと思いました。それとも、和歌山のみかんを絶対に使うというこだわりがあるのかなと思いました。

(C児の作文から)

私が一番すごいなあと思ったことは、ペットボトルの清涼飲料水が日本で最初に作られたことです。これは、工場見学に行き初めて知りました。このことは、一番の“ほこり”だと私は思いました。疑問は、私がかつてない思いかもしれないけど、JOINジュースのことで、和歌山産の美味しいみかんを使っていると言っていたけど、輸入品よりも値段が2倍ぐらいかかるからもう少し輸入品を使ってもいいと思った。たとえば、和歌山産とアメリカ産の両方を使えばいいと思う。

(D児の作文から)

○第7次…クラスの課題を決め、みんなで話し合おう！

ここでの学習では、『和歌山ノーキョー食品工場』の

特色（様々な清涼飲料水を製造、日本初のペットボトル製造など）やこだわり（安全・安心な製品を生産、みかんの搾汁技術など）に触れる中で、徹底的な衛生管理にこだわり様々な工夫や努力を重ねる「ジュース工場」の実態を幅広く考えさせたかった。子どもたちは、『和歌山ノーキョー食品桃山工場の、1番の自まんは何だろう？』という学習課題に対し、自分なりに考えた根拠を示しながら話し合った。桃山工場の特色やこだわりは数多い。自分たちが見聞きした事柄以外は予想でしかない考えも出されると思われたが、自分の考えを基にしながら話し合うことで、お互いの学びを深めていきたいと考えた。対話型学習では自分の考えを更に深め、自分にはない解釈や着眼点、見方や考え方、価値観といった他者との対話で得られる点も多い。話し合いの場面では、衛生管理や安全・安心が“1番のじまん”というように、食品工場が特に大切にしなければいけないこだわりに触れる意見も多く出された。また、和歌山県産のみかんだけを使用し、果汁100%の「JOIN ジュース」のもとになる果汁を製造していること、工場の安定操業のために大手清涼飲料水メーカーのお茶やジュースをこれからも大量に製造していくことなどが、この工場の“1番のじまん”という意見が出された。



写真2. ジュース工場について考えを交流する

#### 4. 単元学習の考察

社会科の「学びの質の高まり」を支えるものとして、単元構成や学習課題が大きな比重を占める。本単元では、紀の川市桃山町にある『和歌山ノーキョー食品工場』を取り上げた。今年の夏は記録的な猛暑で、お茶やジュースをよく飲んでいるという子どもたちの実態を把握することから学習に入った。その後、ペットボトルやお茶やジュースに関連していることを中心に、ひとり学習で調べる活動を展開した。一人ひとりの調べ学習の成果や疑問を、全体学習の場面で意見交流することで新しい追究意欲が高まった。また、実際にジュース工場の見学をすることで、他社メーカーのお茶やジュースを大量に製造している工場のしくみや工場の特色、こだわりだけではなく、「JOIN ジュース」の製造過程や和歌山県のみかんについての問題についても幅広く考えられることができた。単元構成の中に“み

かん狩り”を取り入れ、みかん栽培に従事する人の話を聞くことができてよかった。「工場の1番の自まん」という学習課題で話し合う場面では、子どもたちは、今まで学習してきた内容や工場見学で知り得た知識などを比較しながら考え、自分の考えの根拠となる資料を準備しながら話し合いに臨んでいた。しかし、食品工場として大切な安心・安全、和歌山産のみかん100%ジュース、全国初のペットボトル入り飲料水製造…というような工場の自まんの多さがたくさん出てしまい、学習が深まらなかった。「工場では将来、100%ジュースと他企業のジュースのどちらを主に生産するのか？」という学習課題なら、工場の特色やこだわりと関連させた考え方が多く表出し、話し合いが深まったと考えている。この単元学習を通して、自分が調べた内容や新たに発見したことを資料にまとめ、わかりやすく友だちに伝えることもできていた。

#### 5. 成果と課題

5年の社会科学習では、春の「南紀旅行」・「田植え」や秋の「稲刈り」などの見学や体験を視野に入れた学習を進めている。また、新聞やニュースなどの社会問題にも気を配りながら単元構成を考えるようにしているが、子どもたちが新鮮な気持ちで社会的事象にぶつかることができるような単元構成や学習課題が必要となる。本単元では、お茶やジュースという身近な飲料を製造している食品工場を取り上げ、ひとり学習と全体学習を織り交ぜることで学習を深めることができた。

対話型学習を進める中で、自分が調べた内容をわかりやすく資料にまとめ、自分の言葉で上手く伝えるといった資料活用能力や表現力、質問力が伸長している。日頃から連帯性のある学級集団を目指しているが、「何でも話せる」、「相手の考えをしっかりと聴く」という点を大切にすることで、一人ひとりの対話力も少しずつ身についてきた。このような受容的な心や態度が、対話力を育てるための基盤であると考えている。しかし、子どもたちの中には、積極的に自分の思いや考えを自由に発言できる子もいるが、静かに友だちの意見を聴いている子もいる。聴くことも大切であるが、自分の出番が来たときには発言できるような積極性を身につけさせたいと考えている。また、対話力は社会科学習の中だけでは十分に身につかない。他の教科や領域の幅広い学習の中で、持続的に対話力を伸長していかなければならない点も今後の課題である。

#### 《参考文献》

- 安野 功 (2008) 『社会科授業が対話型になっていますか』, 明治図書
- 田中 力 (2004) 『社会の見方を鍛える討論の授業』, 学事出版
- 吉本 均 (1980) 『社会科わかる授業づくり』, 明治図書